

トンガ王国の小学校に於ける歯科保健プログラムの広がりと効果に対する考察

○河村サユリ、河村康二、小林清吾、シシリアフィフィタ、シリロトミキ

南太平洋医療隊、日本大学松戸歯学部社会口腔保健学、日本大学松戸歯学部病理学講座、トンガ王立バイオラ病院

目的

南太平洋医療隊はトンガ王国のトンガタブ本島と離島リフカ島で'99年より学校歯科保健活動を行ってきた。う蝕罹患率が高いにもかかわらず治療が出来ない現実があった為で紙芝居やリーフレットを使った歯科保健教育・歯磨き指導・フッ素洗口が中心である。歯磨きと週一回のフッ素洗口を習慣化する為にはトンガ人歯科スタッフの協力は不可欠であり費用対効率の面から使用するフッ素溶液はデリバリーシステムとした。1小学校から始まったこのプログラムだが、'07年春には52小学校へ広がり更に多くの学校で行われようとしている。トンガ人自ら歯科保健プログラムを確立施行していく為の支援として、トンガ人の意識変化や態度・行動変容を知る事は必須と考える。

対象と方法

トンガタブ本島30小学校、リフカ島7校で教師・4年生・4年生の父兄に学校歯科保健プログラムに関するアンケート調査を行うと共にインタビューを行った。(英語とトンガ語を併記)

トンガ人歯科スタッフに同様のアンケート調査とインタビューを行った。

トンガタブ本島にてプログラム実施4小学校、コントロールとして離島5小学校の5年生各100名の口腔健診を行った。この5年生はアンケート調査時4年生だった。

結果

教師の回答では生徒・保護者共にプログラムに対する反応が良いと感じており、生徒に対し積極的にプログラムへの参加を勧めていることが判った。反面デリバリー時間が授業を中断させるため、フッ素溶液の管理を自身で行いたいと考えている事も判った。機材の管理では、十分な状態ではないことも伺えた。生徒・保護者の回答では家庭でも歯磨きの習慣が出来ており、歯磨剤の使用は98.5%、自身の歯の健康に97%の生徒が関心があり、う蝕に対するフッ素効果を96%の生徒が理解している事が判った。12%の保護者は子供が学校でフッ素洗口している事を知らなかった。概ねプログラム実施校では歯科保健が理解されており、本島の2校では毎食後の歯磨きがなされていた。プログラム実施校の増加はトンガ人歯科スタッフが、独自に作り上げたルートで行われており、ラジオで歯科保健プログラムを定期的に放送もしている。

考察

近年民衆化の動きが起き、王政社会が変化しつつあるトンガ王国では、人々はより文化的な生活を目指しており、健康観にも変化が見られる。このプログラムに対し健康省・教育省の大臣が理解を示している事も関係者の参加を積極的にしていると考えられるが、機械の故障や機材・薬剤の不足から治療が進められない歯科スタッフに予防が共感をもたらし、より良い効果を生み出していると思われる。教師・生徒・父兄も毎週、歯科スタッフを眼にし、口腔に対する興味・理解が生まれていると考えられる。

